



明治大学政治経済学 教授
森下 正氏

組合 活性化アドバイス

歴史的・文化的習慣と新しい手法の融合による地域再生

地域おこしや地域産業の再生を目指した中小企業と組合が、各種助成事業を申請してきた際、真っ先に確認していることがある。それは現地の街並みをGoogleマップのストリートビューで、道路の修繕、整備の状況、神社仏閣、公園の草取りや掃除の状況、あるいは空き家や未利用地、耕作放棄地などの保全の状況などをチェックする。地域の人々の歴史的・文化的習慣が維持されていれば、これらが荒んでいることはない。

この歴史的・文化的習慣とは、地元にある農林水産物、伝統・独自技術、観光資源といった目に見えるものではない。こうした地域資源の生成、発展に寄与すると同時に、人々の心に浸透し、日常生活や企業経営のあり方、あるいは企業や地域産業の誕生と発展、特にその維持に対し、多大な影響を及ぼしている地域固有の風土のことである。ちなみに、今日、歴史的・文化的習慣が堅持されている地域では、古民家や空きビルのリノベーションによる新規事業がすでに始まっていることが多い。

例えば、岩手県花巻市のマルカン百貨店は、2016年3月6日に同年6月7日の閉店を発表したが、この発表直後に地元の高校生が立ち上がった。同百貨店6階の地元で大人気のマルカンビル大食堂の存続を求める署名活動を開始したのである。加えて、地元材木店の若手経営者が代表を務め、地元の有志の集まりで花巻駅前のリノベーション事業を手掛けている花巻家守舎が、同百貨店に建物の運営を引き継ぐ申し入れを3月18日に行った。

しかし、同百貨店の全面改修には約6億円の投資が必要となった。そこで、花巻家守舎は、マルカンビル大食堂を存続させるプロジェクトに専念するために、2016年6月1日に上町家守舎を新設した。この上町家守舎は全面改修を断念し、6階のマルカンビル大食堂と1階の店舗のみを残す計画に変更し、投資金額を2億6千万円に抑

えた。さらに6月15日から2億円を目標としたクラウドファンディング（CF）の募集を開始し、8月31日には目標を達成した。またその前日には銀行借入れも決まって、資金調達のめどが立ったのである。

同百貨店は予定通り閉店したが、このプロジェクトによってマルカンビル大食堂は2017年2月20日に営業が再開され、19年度に耐震工事も完了し、その後、新しい店の入居も進んで現在は1階、2階、6階、そして地下1階が稼働している。

地元の若者による迅速な動きには目を見張るものがあるが、CFによる2億円の寄付集めは、全国稀に見る突出した金額である。実は、この背後に花巻固有の歴史的・文化的習慣があると考えられるのである。

まず、全国高校野球大会で有名な花巻東高校の存在である。同校は、二宮尊徳の教えである報徳四綱領（至誠、勤勉、分度、推譲）を継承している。特に「推譲」、すなわち分度を守り勤勉に働くことで、蓄財し、それを世のため、人のために使うという歴史的・文化的習慣を生徒に教えている。さらに、花巻の中心市街地は、かつて多くの近江商人が軒を連ねていた。明治・大正期に花巻随一の規模を誇った米穀商の誠山房は思い出に消えたが、現在でも(株)宮澤商店（宮澤賢治の母の実家）や近江八幡の薬問屋をルーツに持つ小田島商事(株)など、花巻の近江商人は今でも健在である。近江商人といえば「三方よし」だが、特に「お助け普請」、つまり地域の活性化を目指した奉仕の心と行動力が花巻の人の心に今でも根付いているのである。

滋賀県には、全国に誇る固有の歴史的・文化的習慣がある。この心の基盤と現在の新しい手法を融合することで、地元の企業と市民は協働作業をいつでも起動できる。特に、その担い手として、若い経営者が力量を発揮することが期待されるのである。